

綿の語源について

山田巖

語源ということばの意味は、文字通り個々の単語の原義である。文献資料のそなわった時代以後に発生した單語については、その音韻と意義との結合した由来を明らかにし得るものもあるが、多くの単語は、その起源が古く、語源を明らかにし得ないものが多いのである。

古代の人々も語源についてはひじょうに関心をもつていたものと見え、記紀風土記等に多くの地名伝説が載録されていることは、よく人の知るところである。一二の例をあげる。

故是以其速須佐之男命、宮可造作之地求^{ヲマギタマヒキ}ニ出雲國爾^{ニリマシテス}到^リ坐須賀^{ガノ}之^ヲ、吾來^{ヒシクアレ}此^{ニコニ}地^{アカ}我御心須賀^{スガ}須賀斯^ガ而^{シトノリタマヒテソ}其^{コニ}地^{リテ}作^{ヲマシキカレ}宮坐^{ソバ}故^{ソバ}其^コ地^ヲ者^ヲ於^{リテ}今云^{ニフス}須賀^{ガト}也^也。

(古事記上巻)

昔者 纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時 此郡百姓 舉^レ部參集 御狗出而吠之 於此 有一產婦 臨^ニ見御狗 即吠止 因曰^{リテ}犬聲止國^{イヌノコエヤムクニ} 今訛謂^ニ養^ヤ父^ア郡^也。(肥前風土記)

この語源解釈があたつてゐるかどうかは別にしても、上代人の言語意識をさぐるために貴重な資料というべきであろう。このように古来人々は語源に興味をもつてゐたので、鎌倉時代には経尊という人の著わした名語記^{ナヨウカキ}という語源辞書さえも出現したくらいである。この書に述べてゐる語源説にはいわゆる民間語源説(folk-etymology)に近い荒唐無稽なものもあるけれども、鎌倉時代という時代にすでにこのようないい書物が著わされている点に意義がある。江戸時代になるといろいろ語源について述べた書物が数多く刊行されているが、正しい語源説は少なく、中には捧腹絶倒させるような珍説を展開してゐるものもある。語源を説くにあたつては慎重に言語学的に確実と思われるものを発表しなくてはならない。

今、綿の語源についてと題して発表するこの報告には、特別に私独自の意見や解釈があつてのことではない。数年前、地方に住んでゐる或る人から綿の語源について、特にワタは和語か外来語かという質問を受けたことがあつた。従来、この語源について、どういう説があつたかを調査し、諸説を整理し、少し私見を加えて返事を書いたことがある。たまたまその時の草稿が残つていたので、原稿を乞われるままにその草稿を活字にするわけである。

御質問のワタの語源については、実は従来からいろいろ論議のあるところで、必ずしもまだ学界の定説はないと言えましょう。ワタの語源については、なかなか興味の深いものがありますし、ワタはわれわれの生活に密着したことばだけに、疑問をおいだきになつたのも、ご尤千万かと存じます。以下、従来から出でてゐる諸説を整理しながら、私見を述べようと思います。

ワタの語源については、大概文彦博士が「外来語源考」(明治十七年、一八八四年)で「蘭語 Vatte に起るといへども暗合なるにや」と蘭語語源説に疑問を述べられたのを初めとして、ロシヤ語の Vata が語源だと説く人もいます。

大正四年（一九一五年）に刊行された「日本外来語辞典」（上田萬年、高楠順次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、金澤庄三郎共編、三省堂発行）には、「『ワタ』ハ印度名 Badara 又 Vadara の略音ナリ」（この項の執筆者は高楠順次郎博士）とあつて、以後この梵語から来たという説が有力になつたようです。

ところでワタという語が、記・紀・万葉などの古典にどのようにあらわれているかを調べてみると、古事記では、一字一音式の万葉仮名で記されたものが一例もなく、ただ地名に「綿」の漢字を用いたものがあり、古來この漢字をワタと読んでいます。

淡海之久多アフミノノクタ 此二字以音 綿之蚊屋野ワタノカヤヤニオホ 在猪鹿。カリシ（古事記下巻、安康天皇）

「久多綿之蚊屋野」という地名は、日本書紀でも「久田綿蚊屋野」とこの地名に綿の漢字を用いていますがワタの仮名書きのものはないようです。また、日本書紀では左記の「綿袍」を古来ワタキヌと訓んでいます。

己亥西風而雹天寒人著綿袍三領。ミツヲ（日本書紀卷第廿四、皇極天皇一年四月）

次に万葉集を見ますと綿という漢字をワタと読ませたものが、三、四例あり、一字一音式の万葉仮名で表記された用例も一例見出されます。巻の順に用例をあげていきます。

沙弥満誓詠綿歌一首

白縫筑紫乃綿者身著而未者伎禰杼暖所見アタタケクミユ（卷三、三三六）
綿毛奈伎布可多衣乃美留乃其等和氣佐我礼流ガガレル（卷五、八九二）

富人能家能子等能伎留身奈美久多志須都良牟純綿良波母モモラム（卷五、

以上いすれも綿という漢字をワタと古くから訓んで来たのですが、平安時代の辞書である新撰字鏡・和名類聚抄・類聚名義抄・色葉字類抄などの古辞書にあたつて見ますと、綿という漢字にワタという訓がありますので、ワタという訓みは妥当だと思われます。

前述したように万葉集には、わずか一例ですが、一字一音式の万葉仮名書きのものが見られます。ワタという語が奈良時代にたしかに存在したことの証拠になります。

伎倍比等乃 萬太良夫須麻余 和多佐波太 伊利奈麻之母乃 伊毛我
乎杼許余 (卷十四、三三五四)

さて、奈良時代のワタは真綿まわたすなわち繭綿であつて、木綿のワタはまだ栽培されていなかつたようです。国産の綿はずつと後のことです。奈良時代の頃は、中国においても事情は同じで、かの地でも木綿のワタはまだできなかつたと言われています。奈良時代は木綿のワタはまるでなく、筑紫綿と言われる絹の真綿も貴人はともかく、一般庶人にはとても手の届かない高嶺の花だつたようです。

木綿がわが国に最初に入つた事情は、すでに御承知のことかと思いますが、類聚国史に記載されている次の記事によつて知ることができます。

桓武天皇延暦十八年七月。有一人。乘小船。漂着參河國。以布覆背。有犢鼻不著袴。左肩著紺布。形似袈裟。年可廿。身長五尺五寸。耳長三寸餘。言語不通。不知何國人。大唐人等見之。僉曰。崑崙人。後頗習中國語。自謂天竺人。常彈一絃琴。歌聲哀楚。閱其資物。有如草實者。謂之綿種。依其願。令住川原寺。即賣隨身物。立屋西塙外路邊。令窮人休息焉。後遷住近江國國分寺。十九年夏四月庚辰。以流來崑崙人所賈

綿種。賜紀伊。淡路。阿波。讚岐。伊豫。土左及大宰府等諸國殖之。其法先簡陽地沃壤。

掘之作穴深一寸。衆穴相去四尺。乃洗種漬之。令經一宿。明旦殖之。一穴四枚。以土掩之。以手按之。每旦水灌。常令潤澤。待生芸之。（類聚國史卷第一百九十九 殊俗部 續國史

大系本に據る）

引用が長くなりましたが、延暦十八年（七九九年）參河国の海岸に漂着したコンロン人が、わが国に初めて綿種を持ち来り、翌十九年（八〇〇年）その種子を紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐などの温暖の地に植えたことを述べております。しかし、栽培技術がよくわからなかつたのでしょうか、綿の栽培はその後、絶えてしまつたようです。国産の木綿の綿がひろまつたのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の後、かの地から木綿の種を持ち帰つてからと言われています。木綿のワタの歴史は、わが国においては意外に新しいということがいえますが、ワタの語源をオランダ語やロシヤ語等に求めるのは年代的に見ても筋が通らない」とになります。

さて、高楠順次郎博士説のワタの語源を梵語の Badara または Vadara によると認めるにしても、奈良時代の繭綿のワタと梵語の Badara あるいは Vadara と同じ品質のものであつたかどうか問題が残ります。

ワタの語源については、新村出博士も前から関心を寄せておられますので、以下引用が少し長くなりますが、新村先生の御説を引用致します。

綿といふ語は、印度語の badara 或は vadara の略音であると見做されてゐる。京都の染織学者として知られてゐる明石染人氏の日本染織史にも、ワタは vada から來たと言つてゐる。この印度語原説は贊同者もあちこちに見受けられ、人をして首肯せしめるに足る説であらう。しかしこの語の伝来の経路と時代とに就いては、なほ研究すべきものが残つてゐるやうに思ふ。又木綿の綿の輸入以前、絹の綿の時代があり、更に填充物といふ意味でのワタといふ語が存在して居たことは、ハラワタなどといふ語に徴しても、考慮されなければならぬ。英語に wad といふ語があり、柔い枯草などの詰め物或はそれを詰めることを意味し、wadding とな

ると詰ぬ物、詰め縫なむを称してゐる。又ドイツ語の *watte*, 動詞の *wattieren* などは特に音の外形が日本語と相似てゐて面白く、フランス語の *ouate* や *ouaute* や *ouate* や語が同じ意味に於て存する。*(ouate de soie ouate de coton etc)* 動詞としての *ouater* や *ouate* がある。これはフランス語から英独語に入つたが、或は共同根原から派出したが、又一説によるとアラテン語の *ovum* (卵) から出たとも言はれてゐる。之等の語原説は勿論日印関係語とは全く没交渉であるが、唯音の外形の一一致によつて語原説を樹てると云ふことが危険であり、又確めるには非常に警戒を要するといふ一例として挙げたに過ぎない。であるから我国に於けるワタといふ語の原義を闡明すると共に、木綿といふものが我国に輸入せられた時代及び経路、且又綿の種子、綿の植物が伝來した歴史的研究を経てでないと、この極めて重要であり、多大の興味のある問題は解決せられないのではないかと思ふ。チャ(茶)の語原につては明白白々何等の疑を残してゐないが、ワタの語原説には向後なほ相当考究の余地があらうと思ふ。(新村出「外来語の話」昭和十九年九月刊)

すでに新村先生も述べておられる所、英語の *wad* ハイツ語の *watte* ハイツ語の *ouate* などは、日本語の「タ」と音の外形はよく似てしまはずれぬ、全く没交渉だ、これらの語が梵語とも関係なしとの¹ 1964年版の *Webster's New World Dictionary of the American Language (College Edition)* の *wad* の見出しにある説明を見てお読みいか。

*Wad, [in sense 1, akin to D, G. *watte*, Sw. *vadd*: the Eng. word is formally akin to the Sw. : ult. origin*

probnon-IE]

ハの辞書の説明によりまやと、英語の *Wad* はハイツ語、ハイツ語、スマーthen語と回系統の語であつて語源は印歐語でないと説明してします。従つて梵語の *Badara* あるいは *Vadara* とは無関係のようだ。

東京堂から出版された模垣実氏の外来語辞典には、一往ワタの見出しが出していますが、

ワタ [? badara] 図録

のやうに疑問符をつけて、ワタが梵語から来たといつて説に疑問を提示してます。なお、模垣氏はその著「舶来

語・古典語典」（東峰出版株式会社昭和37年8月発行）（一四九ペー一五〇ペー）では、むしろ積極的にワタを和語と考えたいと述べておられます。

以上、長々と述べましたが、ワタに類似の音をもつていてる英・蘭・独・仏・露・瑞等の諸語は、日本語のワタと関係ないことはわかりますが、梵語との関係は新村先生もおっしゃっているように慎重に研究を要する課題と言えましょう。ことばだけでなくワタという事物の伝来の歴史、いわばひろく文化史にかかる問題かと思われます。

最後に一言つけ加えます。谷川士清の倭訓栞を見ますと、綿と腸とを同語源に見ていて、美奈乃和多迦具漏伎可美余（蟻の腸か黒き髪に）（万葉、卷五、八〇四）弥那綿香烏髮（蟻の腸か黒き髪に）（万葉、卷七、一二七七）など万葉時代の人の用字法から見ますと、偶然かも知れませんが、私には万葉時代の人が腸と綿とを同語源と意識していたのではないかとさえ思えます。なお、古代人は「はらわた」は大腸、小腸のことは「ほそわた」と言っていたようです（箋注倭名類聚抄 大腸波良和太小腸保曾和太）。

「みんなのわた」の「ワタ」「はらわた」「ほそわた」「このわた」の「ワタ」は、綿の「ワタ」と一緒に考えてみる必要がありそうです。

附記 大工さんの実用品である墨つぼの現存最古の墨つぼは、東大寺南大門梁上で明治十二年の修理のとき発見されたものであろうといわれている。東大寺南大門は鎌倉時代初期一一九九年に再建されたものという。

この墨つぼは、再建に従事した大工さんの置き忘れたものであろう。その墨つぼの池（墨をふくませた真綿を入れ、糸をくぐらせるところ）にまだ当時の真綿が残っているということである（日本経済新聞 昭和四年一月一三日文化欄 村松貞次郎氏執筆「今に伝わる大工魂」参照）。鎌倉時代の墨つぼに使われたワタが木綿のワタでなく真綿であったことは、必ずしも木綿のワタの不存在を証明することにはならないが、木綿のワタを墨つぼに使用しようと思つても、恐らく当時はまだ木綿ワタは存在しなかつたであろうとこの記事を読みながら感じたことであつた。